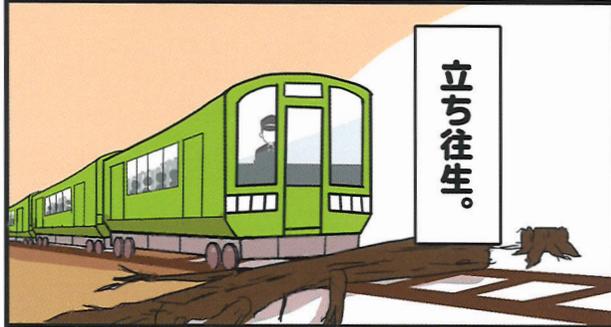
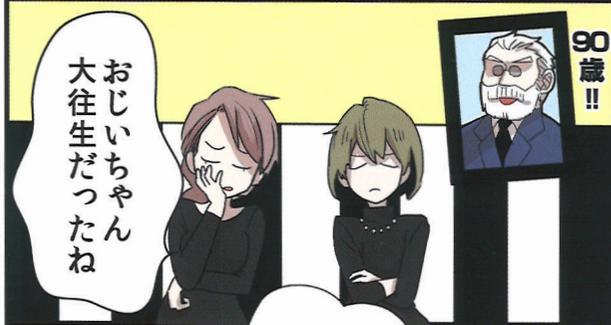




往生際が悪い。



立ち往生。



おじいちゃん
大往生だったね

90歳!!



あなたにとって
「往生」とは
何でしょうか…

お前たち、
『往生』の
本来の意味
分かっとらん
じやろ

往生って
実は…

生

生

真宗大谷派 名古屋別院

〒460-0016
名古屋市中区橋2-8-55
TEL 052 (321) 9201
FAX 052 (321) 3184

<http://www.ohigashi.net/>

お東ネット

往生

私たちは、お身内が逝去された方からご通知をいただくことがあります。その文面に、たとえば「かねて療養中の父は、家族の看護のかいもなく、このたび鬼籍に入りました。生前のご厚誼を感謝申し上げます」などと記されている場合があります。一方、同じ内容で、「往生の素懐を遂げました」と記されている場合もあります。

「鬼籍に入る」と「往生の素懐を遂げる」——。いずれも丁寧な表現であるとは思いますが、逝去された方に対して、真宗の門徒として、どちらの言葉をとることが適切でしょうか。

手元の『広辞苑』（岩波書店）には、＜鬼籍＞の項に、「（「鬼」は死者の意）過去帳。[鬼籍に入る]死んで亡者の籍に記入される。死亡する」と記されています。また＜往生＞の項には、「①この世を去って他の世界に生れかわること。

特に、極楽浄土に生まれること。②死ぬこと。③あきらめてじっとしていること。どうにもしようがないこと。閉口」と記されています。

逝去された方に対して、前者の「鬼籍に入る」よりも後者の「往生の素懐を遂げる」という表現の方が、浄土真宗の伝統に則った適切な言葉であるということが出来ます。

ただ、新聞の文面などをみると、現代では、＜往生＞という言葉は、「結果がすでに出ているのに、往生際が悪い」とか、「質問に答えられず、まるで弁慶のように演壇で立ち往生した」、あるいは「交通渋滞で道路が混んで、とても往生した」などという言葉づかいをすることが多いようです。

親鸞聖人は、＜往生＞について、

往生じやうどというは浄土じやうどにうまるといなり。

（『尊号真像銘文』・『真宗聖典』521頁）

と述べておられます。「浄土に生まれる」という事実を離れて＜往生＞ということはありません。その場合、浄土とは、いわゆる天国ではありません。天国は、キリスト教の教える

「神の国」です。対して、浄土は阿弥陀仏の建てられた国です。私たちに親しい『正信偈』には、「蓮華蔵世界」（蓮華の花のように清浄で美しい世界）、「無量光明土」（はかりなき光の世界）、「安養界」（心を安んじ身を養う世界）などと、豊かな表現で詩われています。

浄土真宗の根本聖典である『大無量寿経』によれば、私たちは、信心の一念において、そのようなみ仏の世界に「すなわち往生を得る」（即得往生）と、つまりお念仏において、このように説示される浄土と直ちに接点をもつことができると教えられます。この念仏の信において、往生浄土の一筋道に立つということ、それが、たとえば『往生論』（『浄土論』）を著した天親菩薩、『往生要集』を著した源信僧都などの真宗の祖師方、そして宗祖である親鸞聖人が言葉を尽くして教えてくださったことです。私たちは、＜往生＞の本来の意味を見失わないようにして、この語を用いたいものです。

安富 信哉（大谷大学名誉教授）